（広告）

企業の志魂(こころ)

―橘　三朗―

歴史に人あり
人に志あり
企業に魂あり

http://kigyonokokoro.com/

Vol. 1245

2017.8.27

飯野製作所
独自の創造力と海外進出で“歳に計りて余りあり”の成長

（荘子）に「日にこれを計りて足らず、歳にこれを計りて余りあり」とある。その日その日の勘定は足りなくても、一年単位で計算すると利益があがっているという意味だ。長期的な視野、大局的な判断の重要さを説いた言葉であり、目先の流行や小利に走ることの愚を戒めた珠玉と言える。まさに“先憂後楽”の如く、地道に誠実に信用を培う企業なり組織、人が、改めて高い評価と実績を得ている。

㈱飯野製作所（代表取締役社長・金原　惣吉氏）は、1945年（昭和20年）10月に個人事業飯野製作所として発足。水栓、蒸気弁等を製作すると同時に、メッキ設備を施し自家製品の各種バルブ類をメッキ加工する一貫体制を整え、主として駐留軍関係に納入していた。文字どおりの家内工業のはしりであり、戦後復興期のひとつの絵柄だったが、同社の第一の飛躍の起点となったのは1951年（昭和26年）に本田技研工業㈱十条工場向けのオートバイ部品の製造及びメッキ加工を開始したことだ。その後の矢板工場、田島工場建設など、上昇気流に乗って事業規模は着実に広がっていった。『考えるにまさる楽しみはなし』という創業の想いを今に受け継ぎ、独自の創造力で常に技術を耕すという“ものづくり”の精神を基軸としている。そして第二の成長を強力に後押ししたのが『フィリピンイイノコーポレーション』の展開で、現在も躍進軌道は高い。創業から60年余、歳にこれを計りて余りありの伸展が続く。

さいたま市大宮区寿能町1・135

手島精管
医療用注射針で世界トップクラスの実力

（坂本龍馬）は「我が命を天に返す」と胸を張り、波乱の生涯を全力で走りぬけた。その卓越していた点のひとつは、多くの志士が依然として“藩”という鋳型に捉われていたのと違い、一段高い視点で国の行末を見ていたところだ。幕藩体制、あるいは尊王や攘夷といったうえでの行動であったら、主導権争いに鎬を削る薩摩と長州の手を握らすことなど不可能だった。自由な発想と抜群の行動力が原点だ。

手島精管㈱（代表取締役社長・手島　由紀子氏）は、医療用注射針を中心に高精度ステンレスチューブの製造で業界を牽引、高品質と高い技術力で世界医療の発展に貢献している。1970年の創業以来、ステンレスチューブが持つ無限の可能性を追求することに徹し、ひたむきに研鑽を積み重ねてきた。同業界における信頼と実績は言うまでもないが、他マーケットでの多品種、特殊加工に寄せられる評価も高い。ベースビジネスである医療注射針用ステンレスチューブ製造においては、世界トップクラスの生産量を誇る企業に成長した今も、さらなる高みを目指して技術開発、品質向上のためのマネジメントシステムの確立に余念がない。まさに“自らの会社の天命を全うする”が如きの真摯な会社づくりだ。昨年には、経済産業省、中小企業庁より「はばたく中小企業・小規模事業者300社」のうち県内5社に選ばれ表彰された。地域に根ざした地場企業としても、存在感が高まるばかりの正統派企業だ。

館林市下早川田町306・1

日本企画
『良樹細根』の会社指針で集う人材、高まる信用

（管仲）は“管鮑(かんぽう)の交わり”で名高い春秋時代の名宰相だ。その管仲が「海は水を辞さず、故によく其大を成す。山は土石は辞さず、故によく其高きを成す。明主は人を厭わず、故によく其衆を成す」との名言を残している。企業も成長、発展を遂げるためには、何より人材を必要とする。時代の求めるものを創り出すのは人であり、そうした人材を求める気持ちが強い経営者のもとに人材は集うものだ。

日本企画㈱（代表取締役社長・利　哲雄氏）は、1974年の創業以来、たゆむことなく顧客企業の多様なニーズに応え、信頼されるサービスの構築に努めてきた情報処理サービスの先駆け。現在、東京・神奈川・千葉などの首都圏や大阪・愛知などで官公庁をはじめとした多彩な取引先を擁し、業界有数の自他ともに認められる堂々の実力派企業だ。情報セキュリティを得意とする強みを活かして、今後は一段とグローバル化が進むことを見越し、海外市場への臨戦体制も整えている。ゆえに「人間こそが会社の財産、宝である」とこれまで育んできた豊富な人材群が、その成長への原動力として力を発揮するに難くない。まさに「人を厭わず、故によく衆を成す」とばかり、人材が目白押しだ。利社長の座右の銘もまた『良樹細根』。会社に来て楽しいかと問うたとき、「ハイ」と社員が言える会社にしたいという信念からの名句と言えよう。「気づく社員づくり」「穏やかな社風づくり」のもとに人材が集ってきた。

船橋市本町6・21・16

梅田製作所
従業員主役で躍動『四軽の計』の真髄企業

（呉子）は戦いに臨む将軍の心構えとして、兵士をいかに前向きに、明るく、そして自然体で働かせることだと説いた。「地をして馬を軽しとし、馬をして車を軽しとし、車をして人を軽しとし、人をして戦いを軽しとせしむ」の『四軽の計』がその真髄だ。受け身ではなく自らが能動的に、他からのお仕着せでなく、自らの知恵と工夫で、そして無理をせず確実に…は、いつの時代も強い組織の原点である。

㈱梅田製作所（専務取締役・梅田　吉男氏）は、アルマイトや各種めっきを中心とした金属表面処理で、着実な成長を続けている業界屈指の先進派企業。後継者不足や環境の変化といった逆風を受け、最盛期は一千社を超えていた同業者も現在は三百社程度に減少した中で、同社は積極果敢な営業を展開し、取引先は一千五百社を数え、全てが受注生産という健全経営を貫いている。その原動力が働き易い環境を目指し、従業員一丸となっての会社づくりだ。自分達だけで工場内の整理整頓、リニューアルを行い、それによって、より連帯感も生まれ、生産性の向上にも繋がったという。現在、精密機器・自動車・医療機器・光学製品など幅広い分野で使用されており、「金属表面処理の梅田」として信用評価も揺るぎない。まさに『四軽の計』の如きの社風こそ、「特急対応」、「多種製品取扱」の方針を支える根幹とも言えよう。従業員の声を反映した取り組みにより、活力と生産性の向上に弾みをつけての伸展だ。

武蔵村山市伊奈平1・17・8

石川金属機工
「天に順う」技術と先見 非鉄合金鋳物の業界出色

（孟子）は、「天に順(したが)う者は存し、天に逆らう者は亡ぶ」と説いている。天とは時代であり、ニーズとも言えよう。天意に従うように工夫をして、いつも正しい方向に向けていれば栄えていく。利欲を塞いで外に表さないようにしていけば、生気は内に充溢して、豊かな生命力を持つことができる。それが内部充実であり、創造工夫の礎となる。厳しい時代だからこそ、“疾風に勁草を知る”企業の出番である。

石川金属機工㈱（代表取締役社長・石川　義明氏）は、船舶関連の特殊製品製造をメインとする非鉄合金鋳物の業界出色。昭和21年創業と歴史も長いが、常に先進の技術を追求し続けてきたチャレンジ精神こそがその継続と成長の原動力だ。特にラダーキャリアと呼ばれる舵周り部品の領域では、中国や韓国の業者が台頭する中にあっても同社の評価が高い。小型化によって材料使用量を減らし、価格低減につなげるという独自の戦略が功を奏していると言えよう。創業時は鋳物だけだったのを、同業他社と差別化するため領域を広げていった先見性も伸展の基軸。関東圏内の非鉄合金鋳物メーカーで、どんな銅合金にも対応できるのは同社のみという強みもある。まさに「天に順う者は存す」の如く、時代とニーズに対応しながら進化を続けてきたゆえの“勁草”だ。さらなる成長を期して人材育成の充実にも余念がない。社員一人ひとりが工夫を重ね、努力精進する会社…それが「石川金属機工」の目指すところだ。

川口市江戸袋2・2・18